



定例会の発表会員感想(28.02.10)

山口・軽川を語る

前田 平木 重男 氏

手稲郷土史研究会に入会して益々歴史の掘り起こしに興味を持ち、知能の再起と健康が増して喜びを感じております。

以前から昔話が好きで少々記録を残しているが、あまり当地外の事は知りませんでした。旧手稲村の大正末から昭和初期にかけての他書物(何周年記念誌)など読んで少々疑問に思う書を見る一人です。

ここで述べたいことを記すと、各々人により表現視と言葉の著わし方が随分と変わるものであると痛切に感じてくる。間違いが一度、書に残ると永久に不審を残す要因となります。

「例えて言えば」昔広大な軽川地方で何も無い原野に何があったと言っても対照になる物もないので解らず、現在何が建っている所にあったと表現しているが、本当は相当離れた所であったりする。

同じ年代に表した軽川市街地図がそれぞれ人によって異なる図が見られるので、どちらが本当か調べるのも面白いと思う。

書物を残すには慎重な記載を要すると今回の発表を鑑み、感じております。

【追記】

1月13日に発行された発足10周年記念誌の私書に誤植がありました。P72の船木旅館写真タイトルを「昭和40年以前の船木旅館(明治10年開業)」に訂正願います。



定例会の会員発表要旨(28.02.10)

新川の歩み

前田 渡部 孝次 氏



1. 新川の生い立ち
歴史/新川の昔話/残された地図から見る新川/花畔・銭函間運河/オタネ浜よもやま話
2. 新川河口一帯の整備
新川と道都づくり/新湾・工業地域としての役割終焉/河口一帯の境界変更/この一帯を道と札幌市で管理する
3. 蘇る古代の手稲
遺跡からみえる古代の手稲(手稲遺跡/紅葉山砂丘)
4. おわりに
新川掘削の目的/運河としての利用価値/新幹線・札幌延伸の影響力大/新川河口はソフトな開発へ

5. 参考

小樽のあゆみ(幕末期)/「オタルナイ」の移転/当時の高島場所

【お詫び】原稿が編集作業日までに未着でしたので、発表資料からその項目を記載させていただきました。 [担当:小田]

次回の予定

次回(4月13日)は定期総会を予定しております。会場は、視聴覚室です。

分科会報告

★ 文芸サークル

1月27日の文芸サークル例会では、乙黒通子会員のお知り合い・青木笙子氏から寄贈いただいた「沈黙の川」について話し合いました。青木笙子氏は本田延三郎の妻子で、本田延三郎は小林多喜二とともに活動した演劇・映画のプロデューサーです。「沈黙の川」には、次のような記述があります。

昭和八年二月二十日正午、小林多喜二は同志今村恒夫とともに赤坂溜池付近で拘束され、その夜京橋区（現・中央区）築地警察署で、特高刑事によって拷問の果てに殺された。

その一週間前、二月十三日、父本田延三郎は検挙され、同じ築地警察署に留置、取り調べを受けていた。

このことが本田にとって、のちに決定的な「烙印」を焼き付けられることになる。**小林多喜二の検挙、虐殺は本田の「自白」に基づくものではないか、ということが、当時もまた後にも囁かれもし書かれもした。**

本田は終生、これについて自ら何の弁明もしなかった。ただ戦後、「五月舎」を立ち上げたとき、劇作家の井上ひさしにだけは、事実の一部を伝えていたようである。

次に乙黒氏提供の資料（「はこだて人物誌」）を紹介します（誌面の都合で一部割愛）。

（小田記）

ほんだのぶさぶろう

本田延三郎 1907年～1995年

明治40年、父池田吉太郎と母本田テツの長男として函館（相生町）で生れる。

大正9年、函館商業学校に入学、弁論部に所属する。14年卒業後、昭和2年20歳のとき、弁論部の先輩だった劇作家八木隆一郎を頼って上京する。翌年、村山知義が主宰する東京左翼劇場に、研究生として入団。同期生に小沢栄太郎、松本克平、1年先輩に滝沢修らがいた。劇作家志望だったが、小道具係をしていた。

昭和9年、同劇場は解散し、新協劇団に入団する。日本プロレタリアート劇場同盟書記長も務め、治安維持法で「ご用」になって、通算3年半を獄中で暮らす。この間に書いた戯曲を、後年、井上ひさしが読んでいた。

昭和23年、劇団民芸の前身「民衆芸術劇場」の経営部を手伝ったが、小沢栄太郎の誘いで俳優座経営部へ移る。俳優座の俳優以外に、民衆芸術劇場が解散したため滝沢修、宇野重吉のマネージャーも一時やっていた。

昭和24年、延三郎の発案で新劇団の映画出演への窓口を一本化した新劇協同社を設立。内実は自転車操業の赤字続きで1年余りで解散、家を担保に借金をし負債を整理する。その後、五月舎時代には自宅を担保にする緊急手段を何度も使わざるを得なかった。

延三郎は新劇協同社時代の借金を整理しながら「もう、こんなばかばかしいことはやめた」と本心で思ったそうだ。そこへ俳優の岡田英次、木村功、金子信雄らが訪ねてきて新しい劇団を作ってほしいと説得される。昭和27年、「青年俳優クラブ」を設立する。翌々年、「劇団青俳」に名称を変更、倉橋健を柱に、文学座の若手演出家だった木村光一、無名時代の清水邦夫や、安部公房らと仕事をやる。俳優も新たに西村晃らが入る。劇団研究所1期生には蜷川幸雄もいた。社長として青俳には20年いたが、45年劇団内部の葛藤から身をひく。

延三郎は青俳時代に、東映の嘱託プロデューサーとして30数本の映画を手がけ、今井正監督の「米」など、ある年のブルーリボン賞1、2位を占めたこともあった。また、同監督の「武士道残酷物語」はベルリン映画祭で邦画初の最高賞の金熊賞を受賞した。

昭和46年5月、芝居が好きで仕方のなかった延三郎は、青俳から身をひいてすぐ、演劇プロデュースの五月舎をスタートさせた。井上ひさし、水上勉の戯曲を中心に、木村光一が演出した。その舞台成果は目を見張るものがあり、毎年のように演劇賞をもらい、延三郎自身も昭和51年に日本新劇経営製作者協会賞を受賞。56年には、紀伊国屋演劇賞特別賞を受賞した。

平成7年3月18日、日本の演劇・映画プロデューサーの草分けとして活躍した本田延三郎は心筋梗塞のため東京都狛江市の慈恵医大第三病院で死去、享年87歳であった。

会報「ていね」の題字、改めて解説

副会長 一ノ宮博昭

手稲郷土史研究会の会報「ていね」の創刊号が発行されたのは、平成20年1月9日でした。相談役・鈴木清士氏（現・手稲区老人クラブ連合会会長）がパソコンを駆使し一人で作成してくれました。フルカラー6ページの力作で、手稲鉱山や山口運河、手稲記念館の見学風景、星置会館屋上のジンギスカンパーティーなど話題満載の紙面になっています。

さて、この会報の題字をどうしようかと鈴木氏から相談を受けたとき、とっさに、私が6年間、手稲で発行してきたミニコミ紙を思い出しました。この題字を「ていね倶楽部」としていたからです。ミニコミ紙の題字というのは、手稲新報、ジャーナル手稲など何でもよかったです。息子の嫁が「ていね倶楽部」でどうかと主張しました。意味するところは「手稲区・LOVE」だったからです。よし、これだと決めました。

しかし、毎号1面の顔となる題字だけに、活字では面白くないと思い、私宅の隣に住む書道家・嘉瀬萬秋氏（本名・宮崎寛、元NTT勤務、手稲区稲穂1-1）に依頼しました。漢字なら縦、横の軸となる一画で形を決められるそうですが、ひらかな3文字をどう表現すれば、「すわり」がいいか大変苦労したとっていました。その頭の3字を本会会報の題字に使わせてもらうことにしたというわけです。

彼はまもなく病死しました。道内の著名書道家がどっと弔問に参集しました。私も町内会長だった縁で葬儀役員に加わりましたが、住職がつけた戒名に、書道家らしい足跡がうかがえないとクレームが出て、お寺が戒名を作り直すひと幕もありました。

星霜を重ね、会報は100号を迎えます。この間、小田真二さん、濱埜静子さん、佐々木光男さん、高木秀子さんら広報、資料部の皆さんは、毎月毎月、次号の企画、執筆依頼、寄稿のレイアウトなど地道な活動、ご尽力をいただき、紙齢を重ねました。

紙面の一隅を拝借し深甚な敬意を表します。